

読書量が学力を決める

ー学力向上のために毎日の読書をー

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：「読書量が学力を決める」とは、どういうことですか。

A：(林明夫：以下省略)読書の絶対量が多ければ多いほど学力は高く、読書量が少なければ少ないほど学力は低いということです。

家庭の収入が高いほど読書量が多く、学力も高い。収入が低いほど読書量が少なく、学力も低いと言われていました。しかし、収入の高い家庭でも読書量が少なければ学力は低く、収入の低い家庭でも読書量が多ければ学力は高いと言えます。

つまり、家庭の収入の多い少ないに関係なく、読書量が多ければ学力は高く、読書量が少なければ学力は低いと言えます。

Q：本をたくさん読めば、学力は向上するということですか。

A：その通りです。学力を身に付けたければ、毎日こつこつと読書をし続けることです。自分の未来は自分で切り拓く、自分の責任は自分でとる、つまり自己責任の原則が大切と考え、本格的な読書をして、ものごとを深く考える能力を自ら育成することが大事です。

Q：どのような本を読んだらよいのですか。

A：学校の各科目の教科書で紹介されている人の書いた本や、教科書で取り上げられているような内容の本を、まずはお勧めします。

学校の教科書に書かれているすべてのことがらについての単行本を読むことは不可能でしょうから、図書館や書店で、少しでも興味をもったことや興味のある本に出会ったら、積極的にチャレンジしてみましょう。

Q：どのようにして、本を捜したらよいのですか。

A：図書館で本を捜し読む能力を身に付けることが大切です。そこで、今通っている学校や県立、市町村立の図書館を気軽に訪れ、図書館司書の先生から図書館の利用方法をよく教わることをお勧めします。図書館司書の先生のお仕事は、利用者の皆様のお手伝い(サポート)をすることですので、十分納得がいくまで指導を受けてください。私は今、この文章を宇都宮大学の図書館で書いています。最近では、ほとんどの大学の図書館が県民すべてに開放されていますので、どんどん利用するとよいと考えます。(但し、閲覧と違ってそこにある本を読むことは可能でも、貸し出しはその大学の学生や教職員以外は認められない場合が多いようです。各々の図書館を利用するときには、このルールもよく調べてください。よい勉強になります。)

Q：書店で本を買うときは、どのようにしたらよいのですか。

A：1か月に1回くらいは少し大きめの書店に行き、2～3時間かけて本を選ぶことをお勧めします。年に何回かは、東京のもっと大きな書店に出掛け、半日くらいかけて本を選ぶとよいでしょう。但し、本を買うにはお金が必要ですから、自分のお小遣いの範囲内で買い求めることが当然です。ご家族に無理を言ってはなりません。

Q：1冊の本は何回くらい読んだらよいのですか。

A：最低でも3回、できれば5～6回読むことをお勧めします。

Q：えっ、そんなに何回も読んだ方がよいのですか。

A：はい。どこに何が書いてあるのかが何となくわかるのが1回目。書いてある内容の意味が大体わかってくるのが2回目。よくわかるのが3回目。さらに、4回、5回と読んでいくうちに、ジワーと身にしみてきて、6回目でなぜ筆者はそのようなことを書いたのかがわかるようになる。そのように思います。よい本ほど、5～10年おきに読み直してみると新たな感動を覚えるものです。

夏目漱石、志賀直哉、内村鑑三、世阿弥、宮本武蔵、福沢諭吉、二宮尊徳の本などは、何回読んだかわかりません。読むたびごとに、新たな発見、新たな感動を覚えます。

Q：最後に一言どうぞ。

A：1冊の本を読み通し、深く感動したところ、これだけは正確に覚えて身に付けておきたいところ(つまり「定着」を図りたいところ)に出会ったら、「書き抜き読書ノート」に書き抜くことをお勧めします。

そして、折に触れ「書き抜き読書ノート」を何十回、何百回読み返しましょう。ものごとを自分の力で考えるときにとっても役に立ちます。この「書き抜き読書ノート」を、皆様の一生の宝物の1つにしてくださいね。

「学力向上の決め手は読書量である。」このことを、今回は是非皆様に考えて頂きたいと希望いたします。

— 2006年10月8日宇都宮大学図書館にて記す —

「書き抜き読書ノート」とはどのようなものなのか、私が毎日書き抜いているものを、2006年8月14日から開倫塾のホームページの中にある林明夫のコーナーにて掲載しております。御参考までに是非御覧ください。